
武闘派高校生の日常

月城 柚

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

武闘派高校生の日常

【Nコード】

N8436C

【作者名】

月城 柚

【あらすじ】

とある高校の日常にて。ひと月に一度しか購買に出ない幻の一品、究極至高カツサンドという、究極なのか至高なのかハッキリしないカツサンドを巡って、五人五色の高校生が火花を散らす！この戦いに勝利するのは、誰だ　　！！ちなみにこの小説、毎週金曜午前〇時に投稿予定です。

プロローグ（前書き）

やたらカオス展開の目立つ作品です。

汗臭い話や格闘話が苦手な方は、極力関わらない方が身の為です。

プロローグ

カッカッカッカッ……。

古典教師の、目にも留まらぬ速度で黒板を書くという荒技は、しかし授業終了と何ら因果関係を持たない。

(~~~~~ッ！ 早く終われクソ教師！ あと三〇秒で授業が終わるだろ！)

苛ついた様子で机を指でトントンと叩いてリズムをとっているのは、真つ赤な髪をした長髪の少年だった。もはや黒板を写すつもりは更々ないと言わんばかりに、教科書やノートは机の中に仕舞われている。

赤髪の少年の名は大谷津三時。おおやしまつとき 本日の昼食ごときに命を懸けているアホな登場人物である。

(まずいかにや〜まずいよにや〜まずいんだにや〜。購買のアレが売り切れちゃうにや〜)

トントンと、屋内用シューズで床と8ビートを刻んでいるのは、ベリイショートでオレンジの髪をした少年。彼もまた、授業を聞く気なんか到底ねえよと言わんばかりに、教科書やノートは机の中だ。オレンジ髪の少年の名は赤月昇。あかつきのぼる やはり彼も本日の昼食に命を懸けた一人だ。

(クッ、あと一〇秒……よりによって今日、古典教師を四時間目に回した学校を呪いますよ！)

カチカチとボールペンを出したり引つ込めたりしているのは、サラサラでストレートな茶色の髪をした少年だ。クラス委員長である彼は一応、体面の為に机の上に教科書やノートを出してはいるが、黒板を写す気はないらしい。

茶髪の少年の名は、真昼正午。まひるのしょうご 例によって例の如し、昼食に命をかけている。

カッカッカッカッ。《キーンコーンカーンコーン……》

チャイムが鳴った。にも拘わらず、古典教師は未だに黒板を書いている。

カッカッカッカッ！《キーンコーンカーンコーン……》
書き終えた教師は満足げに頷きながら、教室を振り返る。が、それより早く椅子を鳴らして勢いよく立ち上がった正午は、

「起立気を付け礼！」

早口でまくし立て、呆然とする教師を余所に走り出した。三時や昇もほぼ同時にダッシュダッシュ。

こうして、

ある購買商品を巡るトンデモバトル昼食戦争の火蓋が、切って落とされた。

戦闘開始でトップスピードはやりすぎな件について

チュイン、と。空気が引き裂かれる様な異質に甲高い音が廊下に木霊する。

「ヒュツ、ヒュツ、ヒュツ！」

チュイン！ チュイン！ チュイン！

三時の蹴りは全てを砕かんと言わんばかりに昇の頭部に襲いかかるが、昇は軽いフットワークで全てを難なくかわしていく。

「あつはつは、甘いじゃ甘いじゃサンジ。そんな蹴りじゃ海王類は仕留められんにや〜」

「黙れ！ つつか誰がサンジだ誰が！ 俺の名前は『ミトキ』だつ つつてんだらうが！」

軸足となる右足だけでスキップする様に前方移動を行い、体重を斜め前に落としながら左足で飛び上がり、昇めがけて跳躍する。三跳骨ティヤオクと呼ばれる身体運用法であり、左足のみでのステップ故に、右足は自分の動かし易い方向に自在に扱う事が出来るのだ。

「ツエイツ！」

「うによら！」

ボパン、と空気の塊を蹴る音が響く程の一撃は、しかし昇はスウエー（上体を反らして避ける技法）でかわす。

「ほう。見事な平行蹴り（イスクーチュオン）ですね。しかも宙を飛びながらとは恐れ入りました。腿拳道タイクオンドウですか」

感心した様子で、走りながら闘うという器用な真似をしている二人を見ていた正午は、感心した様に呟く。

そう。三時が使っている格闘技は腿拳道タイクオンドウ。つまりはテコンドーである。

韓国武術……ひいては蹴り系武術の代名詞とも言われているテコンドーの創始は一九五四年。日本の空手や蹴り技主体の韓国武術『鉄脚テッキョ』を元に生み出された武術で、創始者チエ・ホンヒはこれを韓

国文化特有の二年徴兵の間に組み合わせたという。後に韓国の軍事格闘技に改良された包蹴脚ホンチュオキオンが広まったとされるが、それらを含め韓国では全ての蹴り系格闘技を併せてテコンドーと呼ぶ。

繰り返すが、テコンドーは空手と鉄脚を組み合わせた格闘技である。つまり、

「フシユツ」

しゃがみ込んで足払いを放つ三時だが、昇は綺麗で無駄のないバツクステップでこれをかわす。が、足払いというのはマンガにある様な便利な技ではなく、モーションが大きいせいで割と避けられる事が多いものだ。

「そこっ！」

「うにゃっ!？」

三時は体重を前に移動させながら、昇に向かって拳を突き上げる。低い位置からの一撃というのはなかなか反応しにくいものだが、それだけ昇の身体能力が高いのか、両腕を交差させて拳をガードする。「け、蹴り技だけじゃないんかにゃ!？」

「バアカ。テコンドーってな空手も吸収した格闘技だ。中には徒手なぐ空拳あひぢもあるんだよ」

『テコンドー』蹴りだけ』というのは一般人が生み出した偏見イメージである。空を舞う様な蹴り技が多数存在する為にその印象が強いだだけで、実は拳を使った技も存在する。そもそもテコンドーは日本もそうだが、何より欧米大陸に伝わって以来はそれこそ夜空の星の様に流派があるという。尤も、テコンドーの公式試合に於いて手技では一本を取れないルールから、やはり徒手空拳は普及していないのだが。最近では手技を一切排した流派が殆どだ。

「だ・け・ど・にゃア！」

ニヤリと不気味な笑みをこぼす昇は、交差した腕、クロスアームブロックを前に押しつけて三時の体勢を崩す。元々、無茶な構えだった三時のバランスを崩すのはいとも簡単だと言わんばかりに。

屋内シューズの滑り止めを鳴らし、昇は左拳を顎に当てがい、

「今回の戦いだけは譲れないんだにゃ〜！」

膝、腰、肩と流れる様に回転させて遠心力というエネルギーを蓄えた右の拳を、目にも留まらぬ速さで繰り出した。ヒュボン、と空気を喰らい尽くす様な音が聞こえる前に、拳風だけで三時の長い髪を揺らした。

「……はっ？」

「にゃにゃにゃ。今のを避けるとは、流石はサンジだにゃ〜」

言いが早いのか、呆然とする三時を捨て置き、キュキュとシューズの底を翻して廊下を走り出す。

「テメツ、ボクサーか！」

「当たり前だにゃ〜」

慌てて追走するが、時既に遅し。二人の距離はハメートルは開いていて、この僅かな差は同時に決定的な距離でもある。

「にゃっはははは〜！購買部が一月に一度しか売り出さない限定商品『究極至高カツサンド』はオイラが頂きにゃ〜！」

「やっぱりテメエも目的は同じかアアアあああ！」

究極至高カツサンド。それは文字通り、最高の購買商品である。

鹿児島島の自然で育てられた霧島神話豚の柔らかで肉厚のあるカツに、茨城の烏骨鶏の有精卵を使ったサクサクの衣、そしてしつこい二種類の油を中和する紀州梅のさっぱり風味で食べごたえのある、贅沢な一品である。これを買う為だけに毎月、大勢の生徒が学校のあちこちで乱闘騒ぎを起こしていたりする。

「にゃはは〜、ノロマのドン亀がア！ボクサーに短距離走で追い付こうなんざ、百万光年長いんだにゃ〜！」

「長い!?」

全力疾走する二人だが、肝心な事を忘れていた。

そう。『究極至高カツサンド』を狙っているのは、何も二人だけではないのだ。

「かつて世界を渡り歩いた偉大なる師、マゼランを殺した武術をご存じですか？」

「にゃ？」

不意に、昇は声がした後方をチラリと見てみると、そこには猛獣の如く襲いかかる正午の姿があった。

「……にゃは？」

「ネク・ロツク・ブローケン（首刈り落とし）！」

ゴウ、と唸る正午の左腕が昇の首に極まり掛けたが、昇は何とか弾きながら地面を転がる事で避ける事に成功した。

「チッ、外しましたね」

「こ、殺す気かにやテメエ！」

「いえ、足を止めようとしただけですよ」

走り出す正午。チィ、と舌打ちしながら昇が走り出した時、ようやく三時は横に並ぶ事に成功した。

「な、何だ今のは！？ 投げ技か！？」

「うにゃあ……多分、あれはペンチャツク・シラット……いや、違うにゃ。あれはエスクリマ・カリかにゃ？」

「エスク……何？」

「エスクリマ・カリ。かつて領域侵犯を犯したマゼランを殺した武術と言われているフィリピンの格闘技……いや、戦闘技だにゃ。武術形式は無手（武器を持たない事）と有手（武器を持つ事）の両方が存在し、それまでであった杖術にスペインのナイフ術を組み合わせた派生流派エスパダイ・ダガという二刀剣術もあるにゃ」

「な……何か、スゴそうだな」

「ちなみに、さっき言ったペンチャツク・シラットとエスクリマ・カリは同系統の武術だにゃ。単純にインドネシアで使われる場合がペンチャツク・シラット、フィリピンで使われる場合がエスクリマ・カリと覚えておくといいにゃ」

「つてかお前、バカキャラ万年赤点なクセにどうしてフィジカル戦闘面の説明役だ？」

「カミサマそんな作者に聞けい」

二人が話しながら走っている間に、正午の小柄な身体が階段に差し掛かった。

「うによら!? さ、サンジのせいで正吾が行って仕舞うんだにや
!!!」

「何をさりげなく責任転嫁してやがんだお前のせいだろうがそして
俺はミトキだと何遍言や分かんたテメエは!」

「もらいました!」

まさしく猛獣の様にしなやかにカーブしようとしていた正午だっ
たが、不意に目の前に現れた影を避けるべく横に飛んだ。体勢を崩
しながらも何とか空中で身を捻り、着地する。

「おいおい。廊下を走るとあぶねえだろ、正午。小学校ン時に習わ
なかつたのか?」

「……」

階段を降りて現れたのは、二人の少年だった。

片や長身の男。髪は鮮やかな金に染められていて、オールバック
に撫でつけられている。どう鼻屑目に見ても、ホストにしか見えな
い。

片や小柄な少年。長い髪は目元まで覆い被せていて、その表情は
窺えない。ただ、形よい唇だけがへの字に結ばれている。

「むむつ。奴ら……金髪が暮野夕餉くれのユウケ、無口なのが大月深夜おおつきんやだにや」

「そうか。この上なく胡散臭い説明口調をどうもありがとよ。登場
人物の口語説明ってあからさまになるよな」

「それはオイラに言ってるようで、別の誰かに言ってるッポイにや
」

何故か急に失速しだした物語ほどつままないものはない

「な、なんか知らんがゆうげナイス！」

「く……どうしてこんな時に、よりによってゆうげが!？」

「にははは、覚悟しやがれいだぜえ正午〜！」

正午はゆうげの長身を前に怯み、三時と昇はいまがチャンスと言わんばかりに距離を詰める。シリジリと互いに間合いを測る三人を見つめ、ゆうげはフムと鼻を鳴らし、

「ちよつと待て。ストップ。ウエイト。この騒ぎ……まさかお前らも購買のカツサンド狙いなんのかイ？」

「……え」「」

ギクリと。三時、正午、昇はギチギチギリギチと錆び付いた機械の様な音を発しながら、ゆうげに向き直る。

「あ、その反応、やっぱそうなんか。悪イけど、ありや俺のもんだから。お前らに渡す訳にやいかねっての？」

「……フツ、そうですか」

正午は乾いた笑みを浮かべながら、両手を前で交差させ、背筋を曲げて前かがみに構える。欧米では意外とポピュラーな格闘技であるエスクリマ・カリの技にはジュルスという型があり、状況に応じて型を変えたり、流派によって細かく差異があったりする。まるで日本の空手流派の様に。

「にやつはっは。諦めるなら今のうちだぜい？ あれを奪い合う敵なら、生かしておく必要はにやいかにや〜」

「いや、殺すなよ」

キユキユ、と昇は屋内バツシユを鳴らしながら、身軽そうにステップを踏む。両手は固定せず、まるでストレッチでもする様に右に左に動かしているが、これは決して無防備ノイガードなんかではなく、デトロイトスタイルと呼ばれる構え（ファイティングポーズ）である。某ボクシングマンガで有名なヒットマンスタイルというのは、実はデ

トロイトスタイルの改良だったりするのだ。

「おいおいおい。二対一は卑怯なんじゃね？ 武術家としてそれは恥じるべき行為の代償って事で、俺にカツサンドを譲ってくれてもバチは当たらねえだろうよ？」

ややひきつった笑みを浮かべながら、ゆうげは一步、二歩と後ずさる。ツツ、と冷ややかな汗が頬を伝う。

(……つか、この間に行けばいいのに)

睨み合う三人を横目に、三時は忍び足で階段を下りようとし、

「……深夜！ 止める！」

「……りょーかい」

ドツ、パゴン！

けたたましい騒音を昼休みの廊下に轟かせ、今まで沈黙を保っていた長い黒髪の小柄な少年、深夜の姿が、消えた。

「……へ？」

「……ゆうげの、頼みだから」

光陰の矢の様に、一瞬で三時の懐に潜り込んだ深夜は、三時の顔面めがけて左手を軽く振るう。三時がとっさにその手を払いのけた瞬間、

深夜の右手が、蜃気楼の如くブレた。それが攻撃だと気付くよりも早く、蛇の様にうねり鞭の様にしなる右の拳を感覚で避ける事が出来たのは、まさに奇跡。

三時は深夜の腹を蹴りについて押し返し、何とか距離を取る。距離を取るついでに、拳風が撫でるだけで留まった首を確認する。まるでギロチンを落とされた気分だ。

「……まさ、か、……これは首里手……か？」

「……うん。せーかい」

茫然自失としたまま、しかし三時は目の前で構える深夜を見つめる。左手は手のひらを相手に向ける様に自分の頭の位置まで上げ、右手は腰に溜める様に、軸足である右足はどっしりと重心を支え、左足はまるで間合いを測る様に前に出している。

「そうか……。お前、空手家だったのか！」

「……ぴん、ぽん。せーかい」

全く無表情を崩す事なく、深夜は答える。長い前髪からチラリと覗く冷やかな視線は、睨み付ける蛇の様な色さえ見て取れる。

空手とは、元を辿れば中国拳法である。唐が那覇……つまり沖縄に渡来した際に伝承した武術である唐手からては、いつしか剣術の動きと組み合わせられ、空手と名称を変えて生まれた独自文化の一つ。基本は打撃系の技を使う空手だが、しかし九州南部や沖縄では未だに寝技や関節技を伝える流派も珍しくはない。尤も、公式戦では使えない訳だが。

空手家がステップを踏む光景を見るのは珍しくはないが、そもそも東洋の武術にステップというものは存在しない。近代のいわゆるスポーツ空手は、如何に敵に一撃を当てるかという技術向上の為、ボクシングのステップを取り入れている。これはスポーツ空手の意味が『敵を殺す為の実戦ではなく、己に克つ為の修行』に昇華した結果である。

「……そして何より、深夜の首里手。近代のスポーツ空手では軽いパンチ、つまり手首のスナップを効かせる様な拳では一本を取れない為に、首里手を教えない道場が多いんだにや。下手にクセにやったら、試合で負けるからにや。最近じゃ主流の打ちなはては那覇手と呼ばれる、引き手（左手）を戻す際の腰の回転と肘の捻りを生かしたパンチなんだにや」

「……ってか、今までのモノローグは貴方だったのですか？」

何故か空手を語るボクサーを見つめる、エスクリマ・カリの使い手。何というか、こんな高校生の集団なんて何処にもいない。賭けてもいい。

と、二人の注意が僅かに逸れた瞬間、ゆうげは一気に走り出した。

「あ、コラ！ 待ちなさい！」

「逃がす訳にやいかねえんだにや！」

ゆうげの逃走に気付いた二人も、後に続くこうとする。

「深夜、止める！」

「……りょーかい」

再び高速で、下り階段前まで移動した深夜は、二人をなぎ倒す死神の鎌と言わんばかりに回し蹴りを放つ。正午は四肢を駆使して獣の様にバツクステップ、昇は上半身を後ろに反らして何とか回避した。

「にゃ、にゃはははは……死ぬかと思ったにゃはは」

「そ、そんな攻撃……ジュルスを以てすれば……」

まだ余裕がある様な口振りだが、どこか恐怖した様に声が震えている。

「……足止め、任された」

フン、と鼻を鳴らし、鉄壁の守りの様な深夜が立ち塞がる。

「……三時、どうにかならないんですか？ テコンドーは空手の親戚でしょう？」

「そもそも基盤は鉄脚テッキョウなんだがな。……見る、深夜を」

「うにゃにゃ？」

それぞれ身構えながら、深夜を見る。コー、フーと、深く呼吸を行つ事で全身に気を行き渡らせ、筋肉を岩の様に強固する『息吹法』を行つている。空手に先手なし、とよく言うが、まさしく後の先……カウンター狙いの守りの型である。

「肩を狭め、脇を締め、膝を内側に向けて金的を守る……。見る。

おまけに、三支サンクチの剛体法まで取り込んでやがるぞ」

「にゃ……はは。こりゃどうしたもんかにゃ……」

「打つ手なし……というか、果てしなく手を打ちたくはないですね」

三人は顔を見合わせ、同時に首を横に振った。少なくとも現状、深夜をどうにか出来ない訳ではない。ただ、深夜をどうにかする際に自分が負傷し、二人に先を越されたくないが為に、この膠着状態をどうにかする気にはなれないのだ。

「ゆ……ゆうげエエエえエ！ 厄介な土産置いてってんじゃねえぞデメエこんチクシヨオオオおおオ！」

三時の叫びは、どこか負け犬みたいだった。

何故失速するかって？そりゃネタ思いついた時と比べて書く勢いがなくなるから人間、ノンストップで全力疾走できないもんです。

何故失速するかって？そりゃネタ思いついた時と比べて書く勢いがなくなるから

相変わらず、深夜は剛体法の型を崩す事なく三人の進路 即ち食堂に近い階段を塞いでいた。今から道を引き返して反対側の階段から行こうとすれば確実にカツサンドの購入は望めないだろうし、だからと言ってここで時間を潰されているのも同じ事だ。詰まる話、打つ手はない。

「……あ。いや、あるな」

と、不意に何らかの策が思い浮かんだのか、三時は手をポンと叩いた。訝しむ昇と正午を見て、訊ねる。

「あのさ、ここって二階だよな」

「うにゃ？ まあそうだけど、それがどうかしたんかにゃ？」

「今はそんな分かりきった疑問を言っている場合」

ではない、と続ける事なく、正午もふと何かに気付いた。恐らく、三時の言わんとせん事が分かったのだろう。

三時と正午は顔を見合わせる。そのアイコンタクトの意味が分からない昇と、そもそも話を聞いていない深夜を捨て置き、二人は廊下の窓ガラスを勢いよく開けて階下を見下ろす。舗装されたアスファルトの地面が見える。高さ的には4メートルとちよい。

普通の人間ならば思わず怯んで仕舞う高さだが、蹴り主体の体術であるテコンドー使いの三時と、足腰を主に鍛えて瞬発力を限界値まで引き上げた正午にしてみれば、それは『大した高さではない』。

「にゃ……？ まさか、お前ら……」

嫌な予感があった昇は、頬をひきつらせたまま二人を見つめる。三時と正午は同時に振り返り、同時に言う。

「「俺／僕」は先に「行くぜ／行かせてもらいます」」

「ちよ」

昇が制止する暇もなく、

三時と正午は勢いをつけて窓から飛び降りた。「なば、馬鹿じゃ

ねえのかアイツら!？」と我知らず地を出した昇は急いで窓から頭を覗かせ、下を見た。

タトトン、と二つの軽快な足音が聞こえる。アスファルトの地面に『怪我一つなく』立っていた三時と正午は、昇を見上げながら言う。

「それでは。僕はこの辺りで失礼します」

「深夜を攻略しない限りはどうにもなんねえぞ」

「ぶばっ、馬鹿たるテメエら！ 正気かよオイ！」

「おいおい、動揺のあまり地が出てんぞ、地が」

「情けないですね」

「おい、コラッ！ テメエらちょっと、待て……！」

割と悲痛な、というか寂しげな昇の叫び声を余所に、三時と正午は学食へのショートカットを果たしたものの共闘という意識はなく、ドカバキと激しい衝突音を響かせながら走り去っていった。

その場に残された二人 即ち昇と深夜は互いに顔を見合わせる。何というか、沈黙が突き刺さる様に痛い。

「……あゝ、何だにや。……俺もそこを通っていいかにや？」

「……」

「強行突破！」

深夜が無言で首を横に振った瞬間、昇は先に向かった二人を逃がすまいと、全身全霊を賭けて深夜に襲いかかった。

ズドバババババババババババツ！
ザガギキユキユキユキユツ！

三時と正午。凄まじい蹴りの怒濤の連打と、フットワークと全身のバネを使った手刀が飛び交う。互いの一撃が少しでも触れれば火花が飛び散りそうな勢いではあるものの、全て紙一重の距離感を保ち、擦過する事なく通過していくだけだ。

しかも何よりも驚くべき事は、その激しい攻防を繰り返していながら、走る速度は決して衰えていないという事だ。通常速度で走りながら戦う二人を、学食戦争の為に走っていた足を止め啞然と見つめる周囲の生徒ら。

「なかなかやりますねえ三時！」

「オマエモナー（・・）」

「しかし、貴方では僕には勝てませんよ！ 何故か分かりますか！？」

「俺は負けてねえ！ ……フツ、まあいい、言ってみる。戯言を聞いてやる！」

「……貴方は、『コロンブスの卵』という話を知っていますか？」

「ああ、何か聞いた事があるな」

「かつてアメリカ大陸を発見したコロンブスの手柄を妬んだ輩共が、『アメリカ大陸は誰にでも見つけられた』と非難した。しかしコロンブスは非難した輩共に対し『ならばこの鶏の卵を逆さまに立ててみる』と言い放ったという、有名な話です」

「けど、誰一人として卵を逆さまに立てられる奴は、いなかった……だっけか？」

三時の言葉を聞いた正午は、自分の教え子が難しい問題を解いた様にフツと優しい笑顔を浮かべた。ただしその小柄な身体から繰り出される手刀や関節技を極めようとする攻撃の手は決して止まっていないから、なかなか不気味な演出である。

「ええ、そうです。コロンブスは見事に卵を立てました、逆さまにね。卵の頭を潰して接地面積を広げる事で、卵は立ったのです。そ

「ぼ、ボクサーは……身体力と、耐久力が、売りだにや……。い、一キ口、を、一〇〇……メートル走の、速度、……で、走る事、なんて、……ワケないんだぜい……」

「……その割にはへばってるじゃん。もう保健室行けよお前」

睨み合う　と表現するには昇の目の虚ろな焦点が若干抵抗を生むが　二人の元に、ようやく深夜が到着した。瞬発力はともかく、持久力では確実に昇より下であろう深夜は、無表情ながらも肩で息をしているし、長い黒髪で隠れた顔面はやや汗が垂れ流れている。

「つつか、まさか深夜を振り切るとはな……」

「あ、当たり前だぜい。世界レベルのプロボクサーは、1R三分で12R、フルで戦える身体を作るんだからにや。1R毎に休憩を取りはするものの、単純計算で三六分間は息を詰めて殴り合うハードな格闘技なんだにや。たかが十数分を想定した試合しかない空手家が追い付く道理はないにや」

「ふむ。でもさ、それって一つ誤算じゃん？」

「にや？」

「だつてさ」

轟、と一閃。周囲の空気を巻き込む程に凶悪な一撃を、昇は驚愕に目を剥きながらスウェー（上半身を反らして避ける技術）でかわす。シュビ、と昇の髪を掠めた一撃は、まるでプロ野球選手が頭スレスレで素振りをしたかの如く、背筋を凍らせるには充分な破壊力を秘めている。

「だつてさ、スタミナねえ時に俺と戦うんだしさ、それは完全な誤算じゃん？」

「ラリ……アート……？　ちい、プロレスかにや！」

「正確にはプロレスじゃねえんだけどね。お前、キャッチ・アズ・キャッチ・キャンKAKCって知ってたか？　サクソン民族やケルト民族が英国に持ち込んだ投げ技や関節技主体の武術で、19世紀末から20世紀初頭にかけてアメリカに広く伝わり、現代のプロレスの基礎になった。空手なんかより遙かに多くの『技』が存在しているKAKCは　まあプロレスも

そうだが 技の組み合わせ次第で強くなれるのが利点だ」

昇はチツと舌打ちしながら、ゆうげのリアートをかわした際に掠めた髪を掻きあげ、睨み付ける。

「……ハッ、たかが大衆向けに改良された様な格闘技が、本物の格闘技に勝てる訳がないんだにゃ」

「……ハッハ！ だったら、試してみるといい、ヘタレ拳闘士！」

「その言葉、後悔すんじゃないぞ。……あ、にゃー」

バチバチバチバチ！

凄まじい『眼』のくれ合いが開始されると同時に、ようやく昇に追い付いた深夜はその光景を見て怯む。何というか、そこらを歩いている生徒も我関せずと遠巻きに横目で見ているくらい険悪で一触即発な空気が漂っている。

刹那、互いに一閃。

手首の返し（スナップ）を効かせた昇の左ジャブがゆうげの髪を掠め、ゆうげの巨大な拳が放つ左の裏拳を昇は右手で掴んで止める。ほんの一瞬の、僅かな時の中の攻防。二人は互いを鼻で笑い、一気に学食目指して駆けだした。二人にしか通じていない世界を展開しているらしいが、ようやく追い付いてその場にポツンと佇む深夜は一言、

「……また、走るの？」

ポソリと呟いた。

結果より過程が大事だっけって言うけど、終わり良ければって言葉もあるじゃないか

「見えた！」

戦いの手を決めて休めない三時と正午の視線の先には、全校生徒の殆どを収容する事を可能にした超大型な食堂があった。その規模故に新設した新校舎のワンフロアを丸々使用しているという、学校の施設とは思えない広大な敷地面積を有した食堂。内部は学食と購買に分かれており、食料の総量とは比例せず味もなかなかのもので、かつ学生に優しい値段設定から生徒らに愛され続けているのだ。

「ええい、いい加減に諦めなさい三時！ 僕は貴方に構ってる暇はないんですよ！」

「その言葉そっくりそのまま返してやるから大人しく壁のシミにでもなってる！ 喰らえッ、怒りのジャンピング回し蹴り！」

「はっ！ 甘い甘い！ その様なオーバーアクションな一撃が僕に当たるものか！ メロンパンにジャムシロップをかける様に甘い！」

「胸焼けしそうな表現はやめる眼鏡！ そんなんだからお前は眼鏡なんだよこの眼鏡！」

「なっ……眼鏡眼鏡って、人の障害に対し鳩尾を抉り込むコークスクリュー・フィニッシュブローじみた言葉の罵倒はやめてくれませんか！ 眼鏡バカにすんなサンジ！」

「お前まで俺をサンジ呼ばわりか！ テコンドー 足技使っただけでその呼び方は如何なものかですよ！？」

「名前もだ！」
「ですよね！」

などと全く意味のない言葉のやり取りをしながら、三時と正午は全速力で走りながら互いに攻撃の手を緩めない。すれ違う生徒らはギョツと驚愕に振り返りつつ、遠巻きに呆然と見つめるだけだ。学生達の平和な昼休みに、ハリケーン 気象情報なく台風が通り過ぎてる様な物だ。誰だって怖い。

直線距離にして、たったの三〇メートル。いや、校舎から飛び出して、中庭から食堂まで五〇メートルも距離があるという時点で正直どうかなと思いたくなる訳だが。明らかに敷地の無駄遣いと言うか、この少子化のご時世ににマンモス校（死語）とは珍しい。

「だくもう、ウツゼえんだにやテメエこら！ 必殺、ニヤンプシーロール！ 打つべし撃つべし討つべし！」

「お前こそ、どこまで俺の邪魔すりやいいかな！ うおおッ、ドラゴンインストール！」

ギュババ、ゴゴキン、ズババババン、ベシバシバギン！ どこから、そんな不気味な音が聞こえてきて、三時と正午はピタリと攻撃の手を止めた。が、止めたのはあくまで攻撃の手（いや、三時の場合は足なんだが）だけであり、男二人が取っ組み合ったまま走り続けるというのは何か不気味だ。というか……普通に考えてキモい。「なっ、あれは……昇とゆうげ！？ 仕舞った、もう追い付いたんですか！」

「つつか、何だあの夢のコラボバトルは。いや、この場合、統一感がないと言うべきか、節操がないと言うべきか？」

「両者でしょう」

「……神様の趣味が分かるなあ」

中庭を爆走する二人とは別のルート、旧校舎と新校舎を繋ぐ三三メートルの長い回廊わたりうしを疾走する二人組と、その後ろを走る一人。昇とゆうげ、それと二人に追いつけていない深夜だ。

「にやにやっ、目標捕捉！ 三時と正午を確認、ずえったいに奴らより先にカツサンドを手に入れてみせる！」

「さ・せ・る・かあ！ 手に入れるのは俺ら ってオイ、テメエ深夜、へばってないでアイツら止めて来い！」

「……無理……暑い……キツイ……」

「そんな暑ッ苦しい髪してっからだろうがアアアああア！ 切れ！ ばっさり切れ！ 見てて暑苦しいんだよお前！」

「……………だが断る」

「……オーケイ、いつか俺が力尽くで切っちゃる！　そしてこの口論の際にさっさと行こうとしてる昇、行かせるかボケナス！」

「チツ」

瞬発力自慢のボクサー、持久力自慢のレスラー、忍耐力自慢の空手家の三人組が、わーぎゃー喚きながらスピードを落とす事なく渡り廊下を走る光景は異様だ。特にゆうげ。見た目はひよろつと細長く、一見するとホスト崩れにしか見えないのに、あれだけ一番大騒ぎしながら走る奴のタフネスっぷりは異常だ。奴は機能美だけじゃなく造形美も意識する奴なので、筋肉は盛り上げるんじゃなく引き締めているのだ。ナルシストめ。

「どうでもいい話なんですけど、ナルシストって自己愛性人格障害っていう精神病の一種らしいですね」

「いやいやいや。ほんつとにどうでもいい話だな」

尚、余談だが、正確には人格障害という病状も二つに分類カテゴリされていて、社会的責任能力を維持しているレベルの症状を神経症（自身の異常を自覚していたり、ある程度の心のコントロールが可能で、比較的安定した状態）と言い、社会的責任能力が欠如しているレベルの症状を精神病（自身の異常に気付かず、かつ反社会的行動または非人道的行動を起こしかねない状態）と言う。ちなみに人格障害は個々に症状が顕れるとは限らず、複数同時に誘発する可能性もある為に、診断が難しい病気でもあるのだ。

「って、だからどうでもいいって言うてるだろう！　何だって物語シナリオの趣旨に反する様な馬鹿な事を喜々としてやるかなア、この作者はカミサマ！　無駄に文字数ばかり稼ぎ過ぎなんだよさつきから！」

「そして貴方もです」

「ですよね！　だがしかし、ここで俺が止めなければいつまでも続ける気だぞ、あの作者バカ！」

「諦めなさい、天命です」

納得いかねえ！　と叫ぶ三時。やおら諦めた感溢れるため息を吐く正午。そして、遠い彼方で短距離走してる男三人。何とも形容し

がたい奇怪な光景である。

まあそれはともかく、いい加減、食堂の入り口が見えてきた。直線距離は三〇と描写したのにも拘らず、やたら文字数が多いという事は、コイツら余程の早口で喋ってたんだろうか、などと酔狂な酌量ワケを一つ。

ダバン！ と凄まじい音を轟かせて食堂のドアを蹴り破った三時と正午。ほぼ同時に、窓に足をかけて食堂に飛び込んでくる昇とゆうげと深夜。混雑しつつも、昼休みの喧騒を楽しんでいた生徒達の動きがピタリと止まるが、五人は気にしない。何故なら、既にそっちを見ていないからだ。

目標捕捉 取得勝利条件である『究極至高カツサンド』は、残り一つ……！

ただっ広い敷地を有す食堂に溢れる生徒など目にもくれず、三時は障害物を軽やかなステップで回避しながらダツシユする。正午は、驚くべき事にテーブルに足をかけ、人の頭上を跳躍する獣の様に移動している。昇とゆうげに至っては、もはや暴走列車の如く弾き飛ばしながら走り、その後ろを走る深夜が倒された生徒らに謝っている。コイツら、常識知らずってレベルじゃねーぞ。

やはり、誰よりも早いのは、テコンドー使いの三時である。そもそも、テーブル間を移動する正午は足場が悪く満足に走れず、昇とゆうげに至っては障害物をわざわざ弾き飛ばしているもんだから思う様にスピードにノれないのに対し、三時のリズムミカルで無駄のないステップは既にトップスピードに達していた。

「なははははー！ 我が武芸テコンドーこそ最強ナリー！」
「違っ……最強は、空手だ……」

背後からの不意の声に、三時の背が凍る。天性の勘が危機感知能力を爆発させ、右前方にステップしながら半身を捻り、振り返る。

刹那、上空から対地へ斜めに削る一撃。先刻の蹴りが死神の鎌ならば、今のは間違はなく巨人の斧に相当する。

「旋風脚……！？ 馬鹿か、走りながら使う技じゃねえぞ！？」

深夜の一撃は、半回転の回し蹴りではなく、一回転半という驚異の回転力を内包した旋風脚。元は中国武術や鉄脚テッキョウの演武芸としての型ではあるが、元より身体運用法の似た東洋武術を使う深夜にとつては、教わらずとも大した事ではないのだろう。

いつの間に、昇とゆうげより先行したのかは知らないが、深夜は三時の脇を縫う様な動きで走り抜き、

「ナメないで下さい。最強はエスクリマ・カリこそふさわしい！」
猛獣の様な動作で正午が迫る。

だが、しかし。

「ふざけてんじゃねえぞ teme エ！ KAKC に勝てる武術なんざねえ！」

ゆうげの拳が横合いから伸びる。三時は拳を屈んでかわし、左腕でガードする正午の顔面に突き刺さる。ろつとしたところで、奇妙な事が起こった。

ゆうげの拳の軌跡が、大きく外れた。正午の左腕を掠めた瞬間に、肘より先を捻る様な動きで、ゆうげの拳の軌道をそらしたのだ。大振りの一撃をミスした事で姿勢を崩しながら、ゆうげが叫ぶ。

「なっ……馬鹿な、化勁かけいだと!？」

「エスクリマ・カリは、ポンチャック・シラットやスペイン剣術に加え、太極拳の流れも含んだ統合戦闘術！ その動きにより、簡易太極拳とも呼ばれているのです！」

化勁とはコロの動きを用いた防御法で、攻撃を受けた瞬間に腕を横回転させ、攻撃の打点ポイントと方向ベクトルをズラす動作だ。これは中国拳法で基本の動きとされる。

東洋武術は『自分より巨大な敵を倒す』技術であり、隙を突いたり急所を突いたりといった戦法を得意とする部分がある。そういう意味では『攻撃を受け流す』技術は必須であり、身体の小さな正午には、螺旋に動き攻撃を無力化する太極拳は合っているのだろう。そもそも東洋人の身体は、筋肉がつきにくい代わりに、身体のキレやバネという『捻る事』で効果を発揮する『ものだ』。

尤も、それも生活の欧米化が進む現代、ゆうげの様に身体の大きな東洋人も珍しくはなく、筋肉もつきやすかつたりするのだが。

深夜が駆ける、三時が追走するが間に合わない。ゆうげは正午の足止めに回っている。深夜とゆうげはコンビなので、深夜の勝ちはゆうげに繋がるのだ。

だが忘れてはいけない。

脚力ではテコンドーやエスクリマ・カリに及ばないものの、瞬発力だけはメンバー最強の男がいる事を。

「フオークスマッシュ！」

突如、深夜のこめかみめがけて『線』が飛来した。前方右斜めより、フオークボールの様に落ちる拳が。その軌跡は弧を描く『線』。
「くっ!？」

死角からの一撃だ。避けきれないと判断した深夜は、即座に右腕を死に手代わりに、左手で首里手を繰る。が、当たらない。

昇はボクサーだ。0・3秒で飛来する拳撃ミサイルをかくくりながら交戦たかうのだ。体重も乗ってないジャブのカウンターなど、避けれぬ道理はない。

「ボクシングこそ最強、世界で一番洗練された武術だにやー！」

叫びながら、昇が手を伸ばす。その先には『究極至高カツサンド』が。パンチに必要なのは握力と背筋であり、驚異的腕力でカツサンドを掴む

「させるかア！」

と同時に、三時の蹴りが昇の腕を弾く。ポーン、と宙を舞うカツサンドがコミカルである。

「俺のカツサンド！」

「貴方ではありません、僕のです！」

「ぬかせ、オイラのなんだにや！」

「渡すかポケナス共！」

「……僕らの」

叫びながら、全員が一斉に跳び上がる！ 前代未聞の空中戦……

！ 一つのカツサンドを五人の戦士が追う！

「どうでもいい話なんですが、『前代未聞の空中戦』ってテニスのキャッチコピーじゃないですよね」

「言ってる場合かッ！」

「『一つのボールをリヨーマとリヨーガが追う』ってのもあったにやー」

「テニスで一つのボールを追ってどうすんだよ。打ち合うもんだろ」
「っってお前らモウ!?!」

いまいち締まらない三人にツツコミを入れる苦勞人担当・三時。
深夜は傍観している（跳んでるけど）。

五人による激しい攻防の中心には、カツサンド。だがしかし、自ら跳躍した五人に先立って飛ばされたのだ、何よりも早く落ちるのは道理と言えよう。

何事もなかった様に陳列された棚に落ちる究極至高カツサンド。

購買のおばちゃんは乱闘騒ぎに慣れてるのか、特に驚いたりしていない。どんな学校だ。

「チイ……着地してからが、最後の戦いだ！」

「フツ。臨むところです」

「誰だろうと、オイラに勝てる奴はいないんだにや」

「ハッハ！ 全員蹴散らしてやるよ！」

「……負けない」

空中で勇む五人。テコンドー使いである三時と、エスクリマ・カ
リ使いの正午、ボクサー昇にレスラーゆうげ、そして空手家の深夜
の都合五名が火花を散らす！

が、

「すいませーん。究極至高カツサンドーっー」

「はい、五〇〇円ね」

五人が着地する前に、横合いから伸ばされた生徒の手に渡るカツ
サンド。その生徒は「やったー！ これ一回食ってみたかったんだ
よなー！」と喜びながら、早々に去っていった。

「……」x5

スタン、と五つの足音が、寂しく響く。一時は五人のせいで固まっていたが、喧噪を取り戻した食堂にて、どんな音よりも確かに聞こえた。

こうして、俺達の昼食戦争は幕を閉じた。

教訓：必要以上に熱くなるな。とりあえず落ち着け。まあ、話はオチ付いてないけど。
お後がよろしいようで。

結果より過程が大事だっけ、終わりが良ければ言葉もあるじゃないか
この小説は、自サイトに載せていたものを転用し、加筆・修正を加えたものです。

ご意見、感想、指摘などありましたらどうぞ仰ってください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8436c/>

武闘派高校生の日常

2010年10月8日15時33分発行